

# 海外移住 資料館 だより

Japanese Overseas Migration Museum News No.49

2018  
March

日本人の海外移住は100年以上の歴史があります。  
JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移住者の歴史と、その子孫である日系人について広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館  
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階  
Tel:045-663-3257(代) URL: <https://www.jica.go.jp/jomm>  
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 朝熊由美子

## 南米の邦字紙

～ブラジル、ペルー、アルゼンチン日系社会の日本語新聞～



ブラジル・サンパウロ市内のバンカ(新聞、雑誌の売店)で売られている邦字紙 写真:深沢正雪

# 日系社会の歴史を記録し続ける 南米の邦字紙



移民が日系社会のニュースを伝えるために発行している新聞を邦字紙と呼んでいるのよ。

海外邦字紙とは、海外に移住した日本人、日系人を対象に現地で発行されている日本語新聞のことをいいます。故郷を離れて異国に渡った移民にとって、言葉は大きな壁でした。見知らぬ土地の事情や故郷日本の実情、日本人会や移住者仲間の消息を日本語で伝えてくれる新聞は、大切な情報源でした。

日系社会のオピニオンリーダーとして常に移民に寄り添い、情報を発信し続けてきた邦字紙は、日系社会の歴史そのものでもあります。

今年は、日本人ブラジル移住110周年、日本アルゼンチン国交樹立120周年にあたります。南米の移民の歴史を記録し、現在も発行を続けているブラジル、アルゼンチン、ペルーの主だった邦字紙を紹介します。



ブラジル・サンパウロ  
サンパウロ新聞



ニッケイ新聞

ニッケイ新聞  
NIKKEI SHIMBUN

## 戦後の日系社会の混乱を収束するために創刊

110年前の1908年、コーヒー農場での労働のため、第一回ブラジル移民船「笠戸丸」で781人が海を渡りました。現在ブラジルには、世界で最多の約190万人の日系人が暮らしています。

ブラジルで最初に創刊された邦字紙は、1916年1月発刊の「週刊南米」です。同年8月には「日伯新聞」が、翌年8月「伯刺西爾時報」が、いずれもサンパウロ市で創刊されました。

週刊南米は、ブラジル邦字紙の先駆けでしたが約2年で廃刊。日伯新聞は、日本の移民政策は棄民政策に等しいと移民会社を批判し、移民会社の機関紙的役割を持った伯刺西爾時報と対立していました。

日本からブラジルへの移住は1926年から1935年が最盛期で、戦前戦後あわせて26万人の移住者数のうち、半数にあたる13万人が移住しています。

同時期に「聖州新報」(年表参照、聖州はサンパウロ州の意)、「日本新聞」(1932年創刊)などが次々と発行されました。

1930年代後半は邦字紙の発展期で、1938年頃には週刊から日刊となり、発行部数も最大で8,000部程度だったものが、日伯新聞19,500部、伯刺西爾時報17,000部、聖州新報9,000部まで拡大しました。

しかし、第二次大戦の気配が強まると、日本移民を取り巻く環境は厳しく変化し、1941年8月外国語新聞禁止令が出され、すべての邦字紙が廃刊を余儀なくされます。

邦字紙が廃刊されて以後、移民の間では「ブラジルの新聞は日本と敵対する連合国側のデマ宣伝で信用できない、日本からの短波放送のみが信用できる情報である」とする人々が多くなりました。

終戦を迎えた日系社会では、日本の敗戦を信じることができず日本は勝っているはずだとの信念を崩さない「勝ち組」(信念派)と、日本の敗戦を認識し受け入れていた「負け組」(認識派)に分かれて激しく対立します。

やがて認識派の人々に対し、「日本の敗戦を口にする者は日本人にあらず」と「勝ち組」組織から脅迫状が送られてくるようになり、ついに1946年3月には認識派幹部が襲われ死亡する殺傷事件に発展。その後、「勝ち組」と「負け組」の間で暗殺テロが横行し、1947年1月までに20

人以上が殺害されました。

「日本語による正しい情報の伝達」の必要性を感じた水本光任は、外国語新聞の発行が禁止されている中で、ブラジルの新聞の付録版として許可を受け、1946年10月12日に戦後最初の邦字紙「サンパウロ新聞」を創刊します。同紙は日本の敗戦に関する直接的な報道を避け、「勝ち組」を含む多くの読者を得る中で、日本の実情を伝える努力をしていきました。

その後、新憲法が公布され外国語新聞が発行できるようになると、「正しい情報を伝えなくては事態が収束しない」と、戦前の日伯新聞に携わった人々を中心となり、1947年1月1日「パウリスタ新聞」が創刊されます。同紙は、当初から認識派の新聞として日本の敗戦を報道していたため、記者が「勝ち組」組織に狙われることもありました。

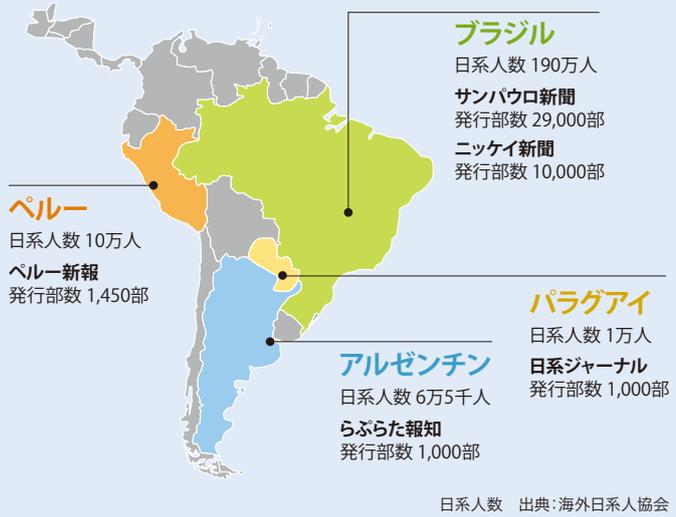
1948年、パウリスタ新聞で「勝ち組」幹部の美談記事を掲載したことがきっかけで編集部内が分裂。同紙から分派する形で、1949年1月1日に「日伯毎日新聞」が創刊されました。



水本の功績を称え、サンパウロ新聞社前の道路はミット・ミズモト通りと命名されている  
提供: サンパウロ新聞社

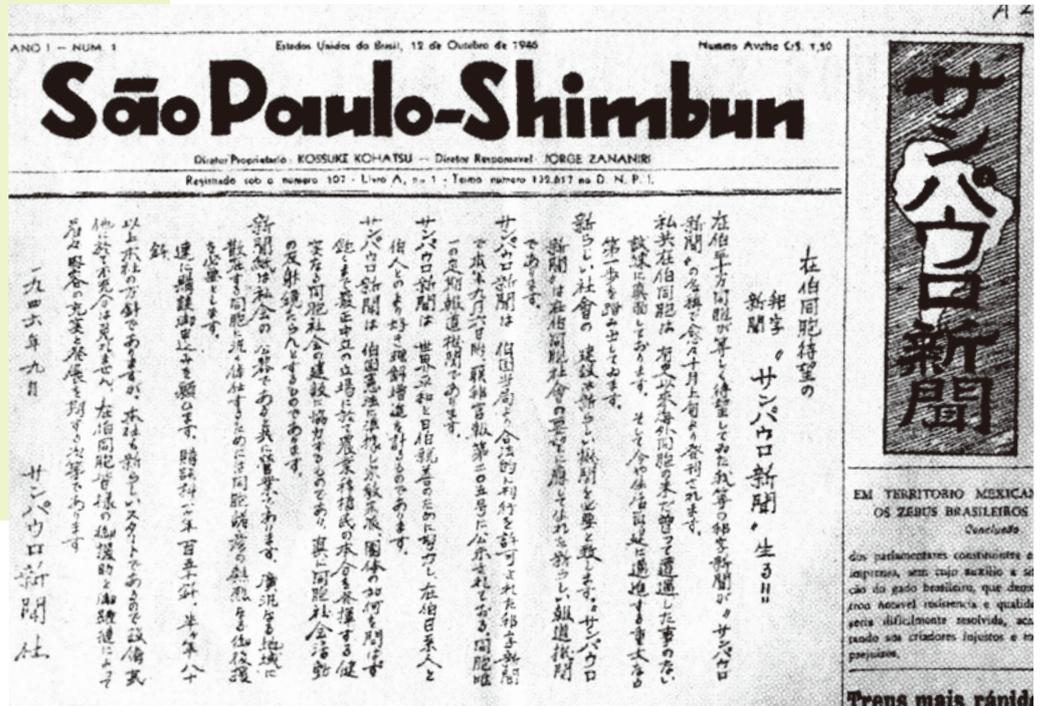


当資料館常設展示の邦字紙のコナー



### サンパウロ新聞創刊号 (1946年10月12日付)

日本語の活字を入手できなかったため、手書きによる発行となった。一面最上段には、「世界平和と日伯親善のために努力し、在伯日系人と伯人とのより好き理解増進を計る」「厳正中立の立場に於て農業移殖民の本分を發揮する健全なる同胞社会の建設に協力するものであり、真に同胞社会活動の反射鏡たらんとする」など、社の方針を述べている  
提供：サンパウロ新聞社



「勝ち組」と「負け組」の抗争が収束した後も、邦字紙は日系社会に大きな影響を与えています。

ポルトガル語が苦手な一世にとっては、日系社会や日本のニュースはもちろん、ブラジルのニュースを知るのも、邦字紙が唯一の手段でした。

戦後の日系社会では、サンパウロ市400年祭協力事業や日本移民周年行事、ブラジル日本文化協会設立や移民史料館の開設など、大きなイベントや建設事業が行われましたが、邦字紙を通じて計画が発表され、紙上で議論が展開され、寄付が集められました。邦字紙はこれらを積極的に報道し、日系社会を盛り上げる役割を担っていました。

その後、一世の高齢化と1980年代半ばからの日本への出稼ぎ現象によって読者が減っていく中、1998年3月3日、それぞれ50年の歴史を持つパウリスタ新聞と日伯毎日新聞が合併し「ニッケイ新聞」となりました。

現在は、新聞発行のほか、各種イベントを主催したり、紙面で連載した移民の歴史を日本語やポルトガル語で本にまとめて出版したりするなど、多角的な事業を展開しています。



ニッケイ新聞出版の書籍 提供：ニッケイ新聞社

サンパウロ新聞 日刊(火曜～土曜発行)	全8ページのうち日本語7ページ、ポルトガル語1ページ <a href="http://saopauloshimbun.com">http://saopauloshimbun.com</a>
ニッケイ新聞 日刊(火曜～土曜発行)	全8ページ日本語、「週刊Jornal Nippak」全12ページポルトガル語 <a href="http://www.nikkeishimbun.jp">http://www.nikkeishimbun.jp</a>

## ペルー日系社会にとって魅力的な紙面づくりを

1899年、ペルーへの最初の日本人移民790人を乗せた「佐倉丸」が横浜からカヤオ港に到着。初期の移民たちの多くはサトウキビ耕地での契約労働者として苦労を重ねました。しかし、徐々に経済力をつけリマ市に進出していくようになると、日系社会の出来事を発信する邦字紙の創刊を求める声が高まりました。1913年南米初の邦字紙「アンデス時報」が創刊。1929年に「リマ日報」「秘露時報」がペルーで発刊されます。

1941年、第二次世界大戦が勃発すると、邦字紙は発行禁止となります。



ペルー新報で使用された活字セット(当資料館常設展示より)

翌年、日本人の資産は凍結され、日本人有力者ら1,700人以上が、アメリカの強制収容所に移動させられました。

アメリカ・テキサス州クリスタル・シティの強制収容所からペルーに戻った長谷川次朗は、

戦争の混乱で壊滅的な状態だった日系社会を再び盛り上げ、日系人同士の繋がりを築くための手段として、邦字紙の創刊が必要であると決意。首都リマだけでなく地方にも出向いて日系人や日系商店に資金面での協力を呼びかけ、株主を募りました。

1950年7月1日、長谷川は「ペルー新報」を創刊。創刊号は日系人の喜びの声や株主の名前を掲載し、その紙面は116ページにも及びました。創刊当時のペルー新報は、リマ市中央区プノ通りの3階建のビルを社屋とし、最上階の大ホールではペルー日系社会の祝賀行事が行われました。

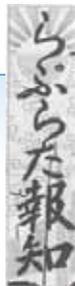


長谷川次朗  
提供：長谷川マルティナ

現在、社長を務める長谷川マルティナは、創業者長谷川次朗の孫にあたります。日系五世、六世の時代に入ったペルーにおいて、同紙は若い世代に日本語だけでなくスペイン語で、一世の時代から受け継がれた価値観や日系人としてのアイデンティティについて、情報発信していく努力を続けています。



## アルゼンチン・ブエノスアイレス らぶらた報知



らぶらた報知 週刊(毎週木曜日発行)

全8ページのうち日本語4ページ、スペイン語4ページ

## 創刊70年 敗戦後の故郷沖縄の様子を伝える

戦前のアルゼンチンでは「ブエノスアイレス週報」「垂爾然丁時報」「ラ・プラタ新報」など邦字紙が次々と創刊され、戦中は、アルゼンチンが日本に宣戦布告する1945年3月まで発行が続けられました。

第二次世界大戦の日本の敗戦により、沖縄が日本本土から切り離され米国の統治下に置かれると、約7割が沖縄出身者であるアルゼンチン日系社会に不安が広がります。

母国沖縄と音信不通となったアルゼンチンの日系社会では、いろいろな噂が飛び交いました。

1947年2月24日、当時の在亜沖縄県人会のリーダーが集まり、正しい情報を伝える手段として邦字紙の発行を計画、ブエノスアイレス、コルドバ、ロサリオ在住の沖縄県人から株主を募りました。

23人の沖縄出身者が株主となり、1947年9月9日にらぶらた報知社

を設立、翌年1月17日に第1号を発行しました。敗戦後の日本や故郷沖縄各地の事情を伝えることを第一の使命とし、アルゼンチンのニュースと日系社会のニュースを日本語で発信しました。

最初は沖縄県人の新聞として出発しましたが、現在ではアルゼンチン唯一の邦字新聞として発行を続け、今年、創刊70年を迎えます。



沖縄の日本復帰を報じるらぶらた報知(1972年5月16日付)各日系団体からのお祝い広告が掲載された

# 邦字紙の使命は移民の貴重な体験を記録すること

ブラジル・ニッケイ新聞社編集長  
深沢正雪さん



六世まで輩出し190万人といわれるブラジル日系社会で、邦字新聞は現在2紙で、その発行部数はあわせて3万9千部。日本語を解する読者は減少の一途にあります。そんな中、日本語紙面には漢字にルビを振るなど、新たな読者開拓にも取り組んでいるブラジル・ニッケイ新聞の深沢編集長に、邦字紙が日系社会で果たしてきた役割について伺いました。

今年は「明治150年」であると同時に、ブラジル日本移民110周年です。

明治時代は、日本という国が250年もの鎖国から目覚め、世界とのつながりを回復した時期。グローバル化が始まった激動期でした。グローバル化のアイテムは端的に言うと「ヒト、モノ、カネ」ですが、「人のグローバル化」の始まりは「移民」だったといえるでしょう。

ブラジルへは計26万人の日本人がやってきました。人が動けば、色々なものがそれにともなって移動します。家族単位で移動すると、日本語も日本の文化も運ばれます。ドアを開けるとブラジルですが、「家の中は日本」のままなのです。

ブラジルへ移住して、やがてポルトガル語で必要なことは伝えられるようになって、移民が本当に喜怒哀楽を表現できる言語は、やっぱり日本語です。だから日本語の新聞が重要な役割を果たすのです。

邦字紙には、国境を超えて生きた移民の日々の記録が延々とつづられてきました。日本人が外国に出て生活を始めた時、何に困り、

どんな挑戦をして、どう成功したか、失敗したか—という貴重な体験が書かれています。邦字紙の使命は、そんな25万人分の日本人移民の経験を文字化すること。放っておけば、その体験は水の泡のように消えてしまいます。

かつては、日本を出た日本人だけが、移住先で現地社会との衝突の荒波にもまれましたが、今日では日本自体がグローバル化の大波に吞まれています。外国語の習得や外国人の風俗習慣や考え方を理解しなければ、時代に取り残されてしまう。それは、かつて移民がそうしなければ生き残ることができなかったのと同じではないでしょうか。

## 深沢正雪(ふかさわ・まさゆき)

静岡県出身。1992年にブラジルへ初渡航し、パウリスタ新聞(現ニッケイ新聞)で研修記者。95年に帰国。99年からJICA日系社会青年ボランティアとしてブラジルへ派遣された後、01年にニッケイ新聞入社。04年から編集長。

## 南米邦字紙年表(主な邦字紙)

1913年11月	ペルー	「アンデス時報」創刊
1915年 4月	アルゼンチン	「ブエノスアイレス週報」創刊→1934年廃刊
1916年 1月	ブラジル	「週刊南米」創刊→約2年で廃刊
8月	ブラジル	「日伯新聞」創刊→1939年5月休刊→1940年7月「ブラジル朝日」と改称
1917年 8月	ブラジル	「伯刺西爾時報」創刊 ※戦後1946年12月復刊→1953年廃刊
1921年 9月	ブラジル	「聖州新報」パウルー市で創刊→1934年にサンパウロ市へ移転
1924年 5月	アルゼンチン	「亜爾然丁時報」創刊
1929年 7月	ペルー	アンデス時報など3紙が合併→リマ日報創刊
8月	ペルー	「秘露時報」創刊
1936年 1月	アルゼンチン	「ラ・プラタ新報」創刊→1938年「南亜日報」と改称
1941年	第二次世界大戦勃発	ブラジル、ペルーの邦字紙廃刊
1945年 3月		アルゼンチンの邦字紙廃刊
1946年10月	ブラジル	「サンパウロ新聞」創刊
1947年 1月	ブラジル	「パウリスタ新聞」創刊
7月	アルゼンチン	「亜国日報」創刊→1991年廃刊
1948年 1月	アルゼンチン	「らぶらた報知」創刊
1949年 1月	ブラジル	「日伯毎日新聞」創刊
1950年 7月	ペルー	「秘露新報」創刊→1964年1月「ペルー新報」と改称
1980年 4月	パラグアイ	「日系ジャーナル」創刊
1998年 3月	ブラジル	「パウリスタ新聞」と「日伯毎日新聞」が合併→「ニッケイ新聞」創刊

# 邦字新聞の紙面から 日系社会の歴史を学ぼう!

日系社会で起こった出来事を報道する邦字新聞は、  
移民の生活の記録といえます。

日系社会で起こった事件や祝賀行事の記事、  
社説や広告などから当時の時代背景や社会の動きを  
読み取ることができます。

## 図書資料室(海外移住)で 海外日本語新聞を閲覧できます!

海外移住に関する約3万点の参考文献  
や資料を所蔵している図書資料室(海外  
移住)では、北米、南米、アジアなどで発行  
されている日本語新聞を読むことができ  
ます。また、戦前・戦後に発行され、すでに  
廃刊となった新聞などもマイクロフィルム  
で閲覧できます。

※マイクロフィルム閲覧は要予約。

### 図書資料室(海外移住)

【開室日】  
火曜日～土曜日 10時～18時  
(最終入室17時30分 12時～13時は閉室)  
日曜・祝日・月末資料整理日・年末年始は  
閉室



図書資料室(海外移住)に設置されている  
マイクロリーダー



日米開戦を伝える1941年12月9日付「亜爾然丁(アルゼンチン)時報」  
同紙12月11日付では、「日米開戦と我らの覚悟」と題し、「アルゼンチン国民との融和に努め  
対日好感情を深めることが我々の重大な責務である」と日本人、日系人がとるべき道を示した

### マイクロフィルムリスト

国・地域	新聞名	収録年代
カナダ	ブリティッシュ・コロンビア (バンクーバー)	大陸日報 1908年～1941年
アメリカ	シカゴ	シカゴ新報 1945年～2003年
	ニューヨーク	北米新報・ ニューヨーク日米新聞 1945年～1994年
	コロラド(デンバー)	コロラド新聞 1911年～1917年 山東時事 1917年～1918年
	サンフランシスコ	新世界新聞 1906年～1941年 日米時事 1946年～1986年 日米 1919年～1932年
サクラメント	櫻雨(オウフ)日報 1909年～1939年	
ロサンゼルス	加州毎日 1931年～1988年	
ハワイ	布哇(ハワイ)報知 1912年～1961年	
	馬哇(マウイ)新聞 1915年～1941年	
	ブラジル	サンパウロ 伯刺西爾時報 1917年～1952年 聖州新報 1923年～1941年 日伯新聞 1924年～1939年 南米新報 1930年～1941年 日本新聞 1932年～1937年 ブラジル朝日 1940年～1941年 サンパウロ(バストス) バストス週報 1951年～1978年
	アルゼンチン	ブエノスアイレス 亜爾然丁時報 1924年～1944年 らぶらた報知 1949年～1982年

※欠号あり

- 開館時間 10:00～18:00(入館は17:30まで)
- 休館日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日)、  
年末年始(12月29日～1月3日)
- 入館料 無料

### アクセス

#### ■みなとみらい線

「馬車道」駅(4番出口)から徒歩約8分  
「みなとみらい」駅(クイーンズスクエア方面改札)から  
徒歩約15分

#### ■JR線・市営地下鉄

「桜木町」駅から(汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク)  
徒歩約15分

